

毎日Tシャツに刺繍している。9月12日から17日まで藍画廊で行う「子育てと美術 2016」に参加する作家と画廊のスタッフに着てもらうためだ。業者に出せば金銭と引き換えに時間を省略できることをわざわざ刺繍している。きっかけは佐藤梨香さんの一言だったが、試作を繰り返すうちに気づいた。「手作りであること」金銭と交換不可能な母の愛の表現。社会的に慣習的に「母であること」に課せられているもの、という呪縛に囚われてきただけだろうが（「外注」する方法もあったにもかかわらず）、現実には繰り返し求められ対応してきた。服従したり抗った日々の追体験。いろいろ思い出す。

子どもが産まれてから保育園、小中高と、「手作り」を繰り返し求められてきた。お布団カバー、それを入れる手提げバッグ、給食用ランチョンマット、運動靴入れ、体操服入れ、運動会用や水着のゼッケン付け、バザー用の商品など。保育園入園前や小学校入学前の1週間、慣れないのに完璧に綺麗に作ろうと必死になり徹夜になった。

経済的・子どもの発達上の理由から手作りしなければならなかった時期もあった。ズボンの脇をほどいて布を足してリメイク。我ながらよくやったと思うが、ある日それは「貧乏くさい」と我が子の同級生からバカにされ、ランドセルに宛名のない手紙を入れられるというイジメを受けた。悔しく悲しかった。

「冷凍食品、レトルト食品は体に害がある」と一切使わなかった実家の母の影響は多大で、弁当を作るのが苦痛になり、小学校の夏休みの学童クラブ用の弁当がどうしても作れなくなって、夫に作ってもらった時期もあった。ひるがえって高校時代の3年間、憑かれたように5時半に起き、弁当を作った。「母」の務めをきちんと果たした、という証明になるように。完遂した今は「好きなものを食べ！」と弁当代を渡すが、娘は外食をなるべく避けて、ちゃっかり貯金している。

今回のプロジェクトは、「結婚歴があって子どもがいない」作家が参加している。子どもがいる私は、本来なら参加資格はない。が、企画者兼主催者特権と、「子どもがいる」現在じたいが私にとって予期しなかった事であったこと、そしてその中で感じた抑圧や葛藤を露わにすることで「子育てと美術」というタイトル名を耳にただけで拒否的反応を示した人たちに少しだけ歩み寄りたいと思う。私もあなた方と同じで「子ども嫌い」だった。それが私のモチーフなのである。

mhR／村田早苗